

冬合宿 爺ヶ岳・東尾根 山行記録

リーダー：海輪

サブリーダー：ミズキ・篠原

メンバー：宿六・吉崎(記録)

区分：合宿

目的：雪山を堪能する

山域：北アルプス

山名：爺ヶ岳

予定ルート：一日目・鹿島山荘～P3(1978m)

二日目・P3～爺ヶ岳～P3

三日目・P3～鹿島山荘

形態：冬山

日程：12/31 - 1/2(前夜発)

報告日：1/22

天気：雪

今年の冬合宿は、当初、爺ヶ岳東尾根より鹿島槍ヶ岳へ登る予定だった。しかし、年末から年始にかけての天気
の予報は悪く、実施日が近付くにつれ荒天になるのが確実となった為、爺ヶ岳ピストンに計画変更となった。
出発日も、28日夜発、29日夜発、と変遷し、最終的には低気圧の通過をやりすごしての登頂を目指して、3
0日の夜出発となった。出発前に計画の練り直しを重ね、計画書の訂正をこまめにしておさったリーダーに感謝
しています。

12月30日

夜6時30分、会事務所集合。10分遅刻で到着すると、既に私以外のメンバーで共同装備の仕分けが終わって、
荷物を積むばかりとなっていた。7時出発。今回はコンパクト隊なので、岩瀬号一台で行く。岩瀬さんの運転で
順調、快適に中央道を走り、11時頃「道の駅・安曇野松川」に到着。雨が降った様だが、天気は悪くない。駐
車場の端にテントを張り、少しおしゃべり。到着が早かったので、仮眠、というより就寝、という気分でゆっ
くり眠る。

12月31日

朝4時30分起床。駐車場の地面が凍ってツルツル滑る。寒い所に来たんだ、と実感する。6時頃出発。途中で
雪が降り始め、道は黒いアスファルトから薄く積もった雪道に変わり、大町に入るともうすっかり雪国であった。
7時前に鹿島に到着。鹿島山荘狩野家の前の駐車スペースに車を止め、身支度を整えている間にも雪はどんどん
降り積もり、全身真っ白になる。「今回のテーマは、雪まみれ～」と海輪さんが嬉しそうに宣言する。リーダ
ーはこんなに喜んでいる…。大雪の山へ入ってゆく不安な気持ちだが、随分和らぐ。今日はP3で幕営の予定だ。
朝早いので、狩野家への挨拶は下山後にすることにして、静かな玄関の前を通り東尾根への取り付けへ向かう。
間もなく小さな沢を渡ったところで、ミズキさんからワカン装着の指示が出る。海輪さんとしのさんはスノー
シュー。「ここから先の登りは急だからね。今日の核心だよ。」とミズキさん。えっ、もう核心？始めに体力を使い
果たし、その後の長い尾根道でバテて皆さんに迷惑を掛けそうだ。不安倍增。海輪さん先頭で尾根への登りに取

り掛かる。積雪は30cm位。雪を崩してしまうと地表が現れ、足の掛かりが無くなって登れない。昨年の冬合宿の徳本峠への登りが、一步登って三步落ちる状態だったのを思い出してしまう。しのさんは、買ったばかりのスノーシューの足捌きに苦労して「やっぱり雪はツボ足だよなー」とぼやいている。かつての柴笛隊はどんな雪山でも、ワカンを持って行くことは無かったそうだ。体力自慢の人ばかりだったのだろう。その頃の洗礼を受けているしのさんにとって、スノーシューはただ邪魔らしい。雪みれで四苦八苦しているしのさんの姿は、足枷をはめられたクマさんのよう。でも、なんとか自分のものにしようと工夫して、努力している。一時間程登った頃、岩瀬さんの東雲山の会での知人が追い付いてきた。二人パーティーとのことだが、一人は大分離れていて姿が見えない。強そうなラッセル要員が増えて、嬉しい。積雪は膝から腿へと段々と深くなり、ラッセルの下手な私は、苦労の割に前へ進まない。岩瀬さんから、ピッケルを横にこう持って、前の雪を自分の方へ集めて、その上に足を置くんだよ、と教わる。これで大分効率が良くなった。雪はひっきりなしに降っている。自分の周りの樹木以外は白い幕の向こうに隠れて何も見えない。幸い風が無いので、寒さは感じない。11時頃、やっと1,331mのピークに着いた。時間の経つ早さと、目的地P3への遠さに驚く。ここに赤布を立てて進路を北西に取り、ラッセルの交代を繰り返しながら、少なだらかな尾根を進む。その次の登りは、ザックを置いて空手で取り掛かる。重い荷物を背負ってやるのとは大違いで、楽に登ってゆける。こうなるとラッセルも楽しい。ちょっと調子に乗り過ぎて、ザックを取りに戻った後の登り返しがつらかった。登りきったピークで一休み。そこで、右側の谷からのトレースが、我々の行く先へ伸びているのを発見。しかも、7,8人で付けたと思われるきっちりと固いトレースで、既にバテ気味の私には夢のように感じられた。そこから先は、終始東雲のFさんが先頭で順調に高度を上げ、14時半過ぎ、柴笛隊は大木の下に幕営地を決めて行動終了。もう少し先まで進むFさん達を見送った。テントを竹ペグでしっかり固定し、早速潜り込もうと身体を雪を払うのだが、全身に凍り付いている。防水スプレーを充分にかけたミズキさんと、まだウェアの新しい私は比較的ましだけれども。たわしで掻き落とすように力を込めてこすったが、満足に落とせないまま、諦めてテントに入り、バーナーに火を着け暖を取ると、身体の水がたちまち融けて、着ているヤッケやズボンが濡れてしまった。これでは明日外へ出たとたんに凍結してしまい、寒さで行動に支障をきたすだろう。また、テント内の湿度や結露でシュラフなども湿ってしまった。一つのバーナーに皆で手袋をかざしたり、寝る時に身体の下にヤッケを敷くなどして、少しでも乾かそうと努めた。永年の雪山経験でも、こんなことは初めてと海輪さんは言う。雪の質と気温の影響なのだろうか。そうこうしながらも、今日は大晦日。皆で持ち寄ったおせち料理をつまみ、各々持参のお酒で年越しの宴を開いた。夕食はレトルトカレー。食事担当のミズキさんが、皆に辛さの好みまで確認して用意して下さった心のコもったメニューだ。レトルトにしたのはミズキさんの燃料節約=軽量化の極意。鍋を汚さず、レトルトを暖めたお湯でスープも飲める。テントが二張りに分散する可能性があったので、一人一人の食事の全てに、調理手順をタイプした紙が丁寧に貼り付けてある。外ではしんと雪が降っているが、テントの中は和やかで楽しい大晦日となった。

1月1日

朝5時起床予定だが、周りの木からドサッと落ちる雪に4時半頃起こされた。様子を見に外へ出た海輪さんが「これじゃあテントが潰れちゃう」とスコップで雪掻きを始めた。私も出て手伝う。一晩で60cm位積もった様だ。雪はまだ降り続けている。ゆっくりと朝食をとりながら、明るくなるのを待った。テントの外に一晩出しておいたザックのベルトが凍り付いて、調整不可能なのを何とか背負い、7時過ぎに爺ヶ岳山頂を目指して出発。幕営地からすぐに腰より上のラッセルが始まる。Fさん達はどの辺りに泊まったのだろう、と考えていると、私達のテントから50mも離れないところにテントが張ってあり、Fさん達が立っていた。昨日、ジャンクションピークへの登りの手前でトレースが無くなり、引き返して来たそうだ。今日も一緒に行くのかと期待したが、停滞を決めたそうだ。我々はラッセルを続ける。場所に依っては胸まである、文字通りの雪壁を突き崩して進む。皆、

落ち着いた、丁寧で着実なラッセルだ。ほとんど空身なのにすぐに疲れてバトンタッチする私は、全くの役立たずである。10時頃、ジャンクションピークに到着。幕営地からここまで、たった100mの標高差になんと3時間もかかっている。次のピークのP3までは標高差200m、単純計算で6時間はかかるだろう。行けるところまで行くか？ここで引き返してお屠蘇にするか？お屠蘇の方に皆の気持ちが一致団結。少しも姿を見せてくれない爺ヶ岳の方角を一瞥し、踵を返す。今回の山行で初めて、きれいな雪景色を楽しみながら歩く。木は枝先まで雪に覆われて、どこもかしこも真っ白だ。枝の上に厚く雪を載せてじっと重さに耐えている大木が、少しの風で、待ってましたとばかりにドサッと雪を振り落とし、たまたまその下に居ると完全なホワイトアウト状態が体験出来る代わりに、痛い目にも会う。それにしても、こんなに雪深い景色が見られて、来て良かったなあ、と思う。他の人のトレースではない、自分達が一生懸命刻んだトレースを辿るのもいい気分だ。そして、あつという間の二十分後、テントに帰り着いた。それから九時に火を消すまで、話題は縦横無尽。先輩達の話に感動したり、刺激を受けたりで、ピークは踏めなくても満足の日だった。夜には雪も弱まり、遠くの灯りが見えた。

1月2日

朝5時起床。起き上がるなり、海輪さんが「今日はやっぱり来た道に戻ろう」と言う。昨夜、ミズキさんが帰路について聞いた時には、谷から登ってきたトレースにならって、そちらを下る可能性を話していた。寝ながらどちらが安全か考えていたのだろうか。リーダーは大変だな、と思う。外に出ると雪が止んでいる。二日間よく降った。入山した時から1.5m位積もったのではないだろうか。美味しいうどんの朝食を食べて、テント撤収。凍っているせいで元の大きさに畳めなくて、袋に収めるのに苦労する。ポールの連結部分も凍ってなかなか外れない。どうしても外れない場合は、バーナーで炙るそうだ。お隣のFさん達に声を掛けて、7時に下山開始。Fさん達も、今日行けるところまで行った後に下山するそうだ。登りで私達が付けたトレースは消え失せているが、よく目をこらすと、なんとなく一筋の窪みが見える。そこを外さない様に気を付けないと、ズボッと胸まで雪にはまり、脱出するのにもの凄く苦労する。私は何度もメンバーに救出された。大きな木の傍も要注意。ツリーホールと呼ばれる、雪の柔らかい部分があって、ここはまると深いらしい。急斜面の下りのラッセルはとても楽しい。ふかふかの新雪を掻き分けながら進むのは、水の中を泳ぐ感覚に似て気持ちが良い。斜面以外のところでは苦労しながらも、ルートを外さない様に進んでいたが、1,350mまで下った辺りで、どうやら下る予定の尾根の、隣の尾根を降りていることにしのさんが気付く。GPSで確認するが、間違いはない。登り返しも検討されたが、この尾根をそのまま降りて行くことになった。どうせトレースが無いので、どちらを降りても同じだろう、と私も思った。どんどん高度を下げ、とうとう下山目標地の釣堀が見えて来た。実はここからが、本日の核心、だった。樹木のまばらな斜面の中腹をトラバースするのだ。雪崩が起きそうな、危うい感じの傾斜だ。先頭の岩瀬さんが進むのを、ハラハラしながら見詰める。トラバースした岩瀬さんが、今度は真っ直ぐその斜面を下ってゆくのも心配だ。上から雪崩れたらどうしよう。間を空けてしのさん、海輪さん、ミズキさんと渡り終え、私も緊張しながら後を追う。怖いので、自分より上の様子を伺うと、向こうの木の上に腰掛けた猿がこちらを眺めていた。無事に下り終えて、沢沿いを15分程歩くと車道に出た。ワカンを外し、車道を歩いて12時15分、鹿島山荘に到着。無事を祝って皆で握手を交わす。ところで車はどこに？停めたはずの場所が、そこだけこんもりとした雪の山になっている。も、もしかして、車はこの中？？可笑しくて皆で笑ってしまったが、持ち主の岩瀬さんは愛車のことが心配でならなかっただろう、と今になって気付く。ここで、持参したスコップが大活躍。海輪さんとしのさんが、狩野家への挨拶とおぼの碑に手を合わせに行っている間に、残った三人は、車に傷を付けない様に慎重に掘り出し作業をする。狩野家の若主人にも手伝ってもらい、無事原型のまま掘り出すことが出来た。想定外のおまけが付いた、苦しくも楽しい合宿だった。海輪さん、村田さん、岩瀬さん、篠原さん、どうもありがとうございました。

最後に

帰宅する途中のニュースで、槍平の雪崩で数人の方が遭難したことを知りました。大雪の中の入山に遭難のニュースが重なって、周りに随分心配をかけてしまいました。帰宅後に何人もの会の仲間や友人から、メールや電話で無事の確認をされて、初めてそのことに気付きました。経験も体力も無い私が、無理なことをしたのだと反省しました。ですが、今回の山行で、大雪の予報の中、山へ入ることことも在り得る、ということを知りました。ルートを選べる、ルートを読める、装備に不足が無い、無理をして進まない、退路を常に考える、ラッセルする体力がある、など、沢山の条件を満たす必要があると思いますが、大雪の山を楽しむ方法も確かにある、ということを知りました。